魔血吸の在り方

羊妨害者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔血吸の在り方

【Ｎコード】
Ｎ６７６４Ｚ

【作者名】
羊妨害者

【あらすじ】
メチャクチャな不幸に襲われた僕は、気付けば異世界に居た。初っ端から最悪な自体が襲ってくるけど生存本能全開でなんとか生き延びてやったぜ！ってあれ？なんか体が変なんだけど・・・もしかしてこれって・・・！？

僕の終わりと始まりについて（前書き）

処女作です、どころか初めて物語を書きます。
小説家になろうさんに書かれた作品がおもしろかったので、皆様の暇つぶしに貢献出来ればと思い書いた作品です、拙筆な上、筆に任せて書いているので、それでもよいという方はどうぞ、お読みください。

僕の終わりと始まりについて

目を覚ますと世界が逆さまになっていた

足の方に木々が伸び、その先に空がある

頭上に地面があり、とても質の良さそうな腐葉土もそこにあった

そんな中、寝ぼけた頭で色々考えた挙句、僕は呟いた。

「ここ、・・・どこ？」

それが異世界に来て初めてのセリフだったことを、僕はまだ知らない

＜魔血吸の在り方＞

そんな訳で、段々と晴れていく意識の中、徐々に自分の状態が理解出来てきた

僕はどうやら背の高い木の枝にズボンが引っ掛かって、逆さ吊りになっているようだ

もちろんそういう事が日常的に起きるほど、アグレッシブな人々が僕の家の周りに住んでいることはない（僕はそう信じている）し、当然僕にも逆さ吊りで寝る趣味はない。

そうなってくると、自然に、意識がなくなる前のことについて考えはじめる。

そこで僕は思い出した。

「そうだ、僕は・・・何故か海外旅行になった修学旅行で飛行機に乗ってる途中にハイジャックにあって何故か僕だけ見せしめに殺されかけたところをなんとか反抗し、反撃し、遂に無力化に成功しかけたところでハイジャック犯の最後の抵抗で扉から突き落とされ太平洋の真ん中にヒモ無しバンジーしてなんとか海にうまく飛び込んで水面に浮いていき、遠くに見える無人島に流されながら泳ぎながらなんとかたどり着き、水源を確保して食料を探し、大丈夫そうに見えたきのこを食べたとたん苦しくなって意識がなくなったんだった」因みにそのきのこは猛毒であった

・・・我ながらありえないな、うん

思い返せばここ数ヶ月は不幸のオンパレードだった

マンションの上から植木鉢が降ってきたり（額にかすった）トラックがつっこんできたり（後頭部にかすった）人間違いで殺されそうになったり（脇腹に包丁がかすった）何故かマンホールの蓋が開いていたり（指が引っかかって助かった）などなど・・・

細かいことを入れれば百はあったんじゃないかな、うん

父さんが僕に常々「何があっても生きろ、生きてさえいればいい」と言ってこなかったら、最初の数回で諦めていただろうな

しかしまあやれやれである、結局のところ僕は死んだのだろうか？

別に天国や地獄に行くとまでは思わないけど、いきなり森の中とはこれいかに

もっと分かり易く「あなた死にましたよ」って言ってくれないと懺悔のしようもない

いやこの思考こそ、本当に仕様のないことなのかも知れないけど・・・

と、そこで枝がピキピキと音をたてているのに気がついた

（あ、これは折れるな）っと思う間もなく枝は折れ、頭が地面に吸い込まれる

異常に鈍い体を何とか動かし頭を庇うが、思った程の衝撃もなく地面に落ちた

そこでようやく僕は体を動かして辺りを見る気持ちになった

どうやら森のかなり深い所らしく、人の気配など微塵もない

僕が死んだ（？）はずの無人島はこれほど背の高い木々はなかったように思うし、なにかが足を踏み入れた形跡すらない

そう、僕の足跡すらないのだ

よってここはあの無人島ではないはずだ

他の可能性を考えても、あれほどの高さに僕を引き上げる動物なんているはずもないし、いたとしたって地面に何かしらの跡が残るはずだ

あるとすれば人為的に行われるぐらいだが、それこそメリットがなさすぎる

うむ、このミステリーは僕には解けそうもない

解けないこと、分からないことは後回し☆

テストという関門を毎度くぐり抜ける日本学生にとって必須のスキルだ

しばらく辺りを歩いてみるが、特に何もない、いや、あるにはあるが、素人では判断のつかない事ばかりで意味を見出せない

ここが安全である保証は全くないので、早急に移動しなければ

因みに動物はいるようだ

鳥（？）の声があちこちから聞こえてくるし、虫もいる

獣道のようなものも見つけたし、縄張りの主張のために傷つけられた木も見つけた

傷の位置は大体下から２ｍぐらいの位置だ

・・・やばい、これはつまりその位置に傷をつけることができる動物がいるということだ

熊だとしたら絶対にかなわない、死んだふりは効かないらしいし

兎にも角にも移動しなければということで、僕は太陽（？）の位置を方角の基準にすることにした

太陽（？）の方角は登りぎみで、逆は下りっぽかったけど、僕は太陽（？）の方角に向けて歩くことにした

先ほどから太陽に？が付くのは確信が持てないからだ、もしかしたら地球にとって月にあたるものかもしれないし、沈んだり昇ったりするのかもわからない

・・・しかし面倒なので、僕は太陽（？）を太陽だと思い込むようにしよう、私がそう思うからそうあるのだ、って昔の偉い人も言ってた気がするし

水場を探すなら降りるべきだけど、この場所の状況が知りたい僕はあえて登ることにした

本当なら木に登って辺りを見渡せばいいんだけど、現代の高校生にそれを求めるのは酷である

そんなこんなで登り始めて２時間ぐらい、一向に見晴らしがよくなる気配がない

太陽も低くなってきて、このままいくとこの人工物の一切ない場所で野宿である

流石にあぶないよな、寝て起きれませんでしたじゃ洒落にならん

ちょっと登り始めたのを後悔し出した頃、木々の切れ間が見えた

少し駆け足でたどり着くと、そこは崖になっていた

・・・絶句するほど美しい景色を、僕は人生で初めて見た

夕日が赤く染めあげることで周りの山々は、その威厳をさらに強くし、木々に何とも言えぬ色彩をあたえていた

澄んだ空気はどこまでも見渡せて、夕日の下にわずかに海が見えた

ちょうど僕が立っている場所の真下が川の初めにあたるらしく、そこから川は蛇行しながらも確かに海に続いている

雲は流れ、風が吹き、僕は人生で初めての感動に酔いしれた

（山を登る人はこれを求めていたのか）と、なんとなく知った風な事を思い描いていると、川の途中に橋が架かっているのが見えた

その辺りを注意深く見ると、右側に人工物のようなものがわずかに見えた

よかった！人がいる！と、歓喜をあげようとして思い出す

（夜、どうしよう・・・？）

村に着くまでにどう考えても日が沈む、というか2、3日はかかりそうだ

日が完全に沈む前に寝る場所を決めなければいけない、サバイバル経験皆無の僕にだって分かることだ

一旦森の中に戻り、良さそうな場所がなかったか思い出す

（あそこは落ち葉がたくさんあったから、それに埋もれて寝れば安全かな？それともあの岩場の隙間で寝た方が・・）

などと考えていても、先ほどの景色が頭から離れず、つい振り向いて呆けてしまう

（いつか、いつかもう一度行こう）

そう考えていると、背筋が凍るような、嫌な予感が僕を襲った

僕はとっさに、後ろに倒れるように回避行動をとろうとした

死ぬ直前に起きた百を越える不幸が、彼に第6の感覚を与えていたのである

瞬間、右腕に強い衝撃

左肩から倒れこみ、前転をするように受身をとりながら、予感の正体を確認する

そこには３ｍを越える背丈の怪物がいた

人の形をとってはいるが、体の大きさや手足の指の本数、グレーに近い体色、何より赤い、瞳のない目が人でないことをありありと証明していた

と、そこで、怪物の指先に赤いものが付着しているのに気がつく

おそらく人の血だろう、かなり新鮮で乾いておらず、付いて間もないことが伺える

その段階でようやく気がついた、右腕の感覚が全くない

恐る恐る見てみると、僕の右腕は二の腕を１／５程残して消えていた

僕の終わりと始まりについて（後書き）

勢いで書いてしまった、今は反省している
私は昔から執筆活動に興味があって、書こう書こうと思っていたのだけど、どうにも億劫で遂に今にいたってしまいました。
この作品は、そんな自分の背中を押すために書いた作品です。
つまり見切り発車です。
ですので、いきなり更新がなくなったり、展開がおかしくなったり、数々の矛盾があると思いますが、なんとか完結させてやりたいと思っております。
どうか生暖かい目で見守ってやってください。

感想なんかを送ってださるととても嬉しいです、厳しい意見もどんとこいです、よろしくお願いします。

怪物の在り方（前書き）

とりあえず投下、誰かが読んでくれたらうれしいです。

怪物の在り方

「っっっ・・・・・・・・・！！！！」

危うく叫びそうになって、何とか声を押さえつける

相手は見たことも聞いたこともない化け物、叫ぶ事で警戒させる事が出来るかもしれないが、それが発端になってすぐに殺される可能性の方が高い

命の危機に瀕したことで、死んでから今までいまいち回転の遅かった頭が、いつもより速く回り出す

痛い、熱い、痛い、嫌だ、いたい、イタイ、アツイ、イヤダ、イヤダ、イヤダ、

左手で右肩付近を握り、一応の止血をする

右肩から心臓の鼓動に合わせて血が吹き出す、嫌な汗が全身から吹き出す

いやだいやだイタイイタイイタイイヤダアツイイタイ

今までだってこんな絶体絶命を生き延びてきたんだ、大丈夫、きっと生き延びる可能性は残ってるはずだ！

太陽に向かって走り出す、と同時に化け物がこちらに飛びかかってきた

イタイイタイイヤダイヤダナンデイヤダイヤダツライイタイ

体の大きさに見合わずとんでもなく速いっ！僕の全力疾走の2倍ぐらいの速さだ

木々を盾にしながら、できる限り不規則に走り太陽を目指す

イヤダイタイいたいいたいいたい痛いよぅ・・・

大量の出血のせいで頭がくらくらする

化け物は僕を追い詰めるよう、僕の通った跡そのままに着いてくる

大丈夫、しっかり冷静に考えればきっと生き残れる

時々背中に掠めるような感覚があるが、振り返らない

痛いよ、熱いよ、寒いよ、辛いよ、痛いよぅ

大丈夫、この先にきっとあそこがある

化け物の追撃を何度となく避けながら、目的地をようやく見つけた

僕は遂にあの美しい崖までたどり着いた

僕が振り返ると化け物がこちらを不満げに見ていた

大丈夫、勝負は一瞬だけど、速さは僕より少し速い程度、大丈夫

僕は自分に少し嘘を吐きながらタイミングを図る

・・・化け物が笑った様な気がした

瞬間飛びかかってくる化け物

僕は奴の股の下を滑り抜ける

野球のスライディングの要領で股下をくぐり抜け、化け物の尻目掛けて蹴りを放つ！

弱者が使う強者に勝つための常套手段、それは他の力を使う事

例えば敵の力、例えば重力、例えば相手の油断、それらをフルに使って初めて弱者は強者に勝てる

これで決まればよかったが、僕の蹴りは空を切った

僕が的外れの蹴りを放った訳じゃない

怪物が、僕の認識できる速度よりはるかに速く動いて視界から消えたのだ

音を便りに右を向くと、やはり奴は笑っていた、僕を嘲笑っていた

そうだ、奴は僕が五感で認識出来ない程の速度で、僕の右手を奪っていった

これまでの追いかけっこは、奴にとってはただの遊びだったのだろう

駄目だ、失敗した、おわりだ、しぬ、しんじゃう

ならば次は、さらにこの命を賭けるのみ！

僕は崖に向けて駆け出し、飛んだ

あの川の所に落ちれば、もしかしたら生き延びれるかも知れない

しかしその希望も、すぐに打ち砕かれる

いつの間にか怪物は僕の後ろに立っていて、飛んでいる僕の足を掴んだ

そしてそのままゆっくり振り上げ、反対の地面に叩きつける

咄嗟に左手で頭を守ったが、脳が揺れる、体が軋む、口の中に血の味が広がる

怪物は握っていた僕の右足を根元から握りつぶした

痛いいたいしぬしぬしぬしぬシヌシヌシヌシヌシヌシヌ

僕は奴の手を左足で蹴り、反動で距離を取る

しかし怪物の遊びは終わったのか、即座に近づき拳を僕のお腹に向けて振り落とした

左足で拳に対抗しようとするが、難なく縦に押しつぶされた

その反動で少し距離が取れたが、もはや僕の命は風前の灯火、春の夜の夢だろう

シヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌイヤダイヤダイヤダ
怪物は満足気に僕に近づいて、右手の掌を僕に近づける
万策尽きた僕が思うことは、ただただ一つ
一矢報いてやりたい、何か奴に、少しでいい、蚊に刺され程度でいい、せめて、一矢
左手を動かし、火事場のバカ力で奴の手に噛みつく
僕の足の骨が僅かに手に刺さっていたのだ
そこに全身全霊死ぬ気で噛みつく
奴は少し驚いた様子で僕の左腕を掴み、自分の右手から僕を引き離そうとして、勢い余って僕の左腕を握りつぶした
僕はそのまま放り投げられて中に浮かぶ
世界がスローモーションになる
走馬灯という奴だろうか
色々な事が思い浮かび、それと同時に思考も加速する
死んだと思ったらすぐにまたＧＡＭＥＯＶＡＲか
まああの美しい崖の方に投げ捨てられたんだから上等か

僕は奴から出た僅かな血と噛み千切った皮を飲み込んだ

シヌ？しぬ？死ぬ？死んだ？もう死ぬの？死にたくない死にたくない

いや～我ながら最後の抵抗は見事だった、うん

なんてったって奴に血を出させたんだから、普通の人間にゃ出来ないぜ

よくがんばったよ僕、えらいえらい

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

僕はゆっくり崖に向かって放物線を描く

崖の端に生えている木の枝の下をもうすぐ通り抜ける

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

・・・僕の本能はまだ諦めてないみたいだな

あの枝、手を伸ばせば届きそうだな

まあ伸ばす腕がないんですけどね

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！

腕があれば、もっとあの化け物に、痛い目に合わせてやれるのに

足があれば、もしかしたらあの化け物から逃げられたかもしれないのに

目に小さな小さな村が見える

あそこに住んでる人たちは、この化け物に対抗できるのかな

もし生きてたら、ここに危険な化け物がいることを警告できるのに

もっと強い腕があれば、もっと強い足があれば、もっと強い体があれば

・・・畜生、生きたいな

お腹の底が熱くなる、今の僕の顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃだろう

あの枝に届く腕が欲しい、あの化け物を蹴り飛ばせる足が欲しい、

無茶な行動に耐えれる体が欲しい！

死にたくない、生きたい、生きたい、まだ、生きていたい！！

気付けば僕は、枝を掴んでいた

怪物の在り方（後書き）

とりあえず主人公覚醒、次号待たれよ

一方的な在り方

脳が溶けそうになる程頭が熱い、意識が体を突き抜けたようだ
よく分からないけど、手足が元に戻ってる
化け物がこちらを見てる
だけど不思議と命の危機は感じない
世界はまだゆっくりなままだ

さあ、平穏を取り戻そう

化け物がそばにあった木をヘシ折って上段に構える
そのまま僕に向かって振り下ろしてくる
僕は右手を頭上に持ち上げて、防御の姿勢をとる
今までだったら無事で済まなかっただろうけど、今なら
振り下ろされた木は、僕の右手に当たり、そこで止まった

木が僕と化け物の間でたわむ
化け物はそのまま力を入れつづけ、遂に木が折れた
その折れてギザギザになった断面を僕に突き入れる
僕はその先端を左手ではたく
それだけで狙いがズレて、その突きは外れた
化け物は僕と距離をとり、木を上空に投げた
木は空高く舞い上がり、僕の方に落ちてくる
と、同時に化け物が駆け出し、僕との距離を詰め、必殺の拳をくりだそうとする
僕は木が落ちてくるまでの時間を、のんびりと待って、化け物が詰めてくるのを待った
そして、化け物が拳を放った瞬間、一歩だけ前にでた
化け物の懐にはいった僕は、右手を化け物の胸の中心に、突き立てた
化け物は何が起きたのか分からない様だった
木が地面に落ちる大きな音がする
僕が、右手を捻りながら抜くと、化け物は三歩下がって膝を地面に

着けて、こちらを睨む

化け物は、最後の抵抗とばかりに走ってくる

僕はその頭を蹴り上げる

パンッという音と共に、怪物の頭が血飛沫に変わった

化け物はまるで僕を抱きしめるような姿勢のまま、僕に倒れかかり

やはり僕を抱きしめずに倒れた

体中に化け物の血が着いているが、僕は唇についた血を舐めとって

そのまま意識を手放した

～近隣の村～

（・・・ん！？）

何か、とてつもなく大きな力を感じた

山の方からだったが、見える範囲では異常はない

（ふむ？）

あれが魔法によるものだとしたら相当な規模だ

それこそ、山ごと村が吹き飛んでもおかしくはない

視界に入らない程遠くの出来事とは考え難い程の力の大きさだった

私は全神経を集中しながら山の方を警戒するが、異常は感じられない

・・・思い過ごしだろうか？

今の世の中、何が起きてもおかしくない

警戒のし過ぎと言うことはないだろう

今後、今少し警戒を強めよう

∫?????∫

・・・・・・パパ？

一方的な在り方（後書き）

え～実はこれで最終回です
嘘です、ここまでがプロローグです
まだがんばります！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6764z/

魔血吸の在り方

2011年12月24日06時49分発行